

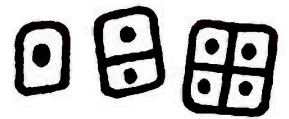
細胞の増殖に関係する遺伝子に突然変異が積み重なって、不死化したものが、がん細胞です。私たちの体の中では、毎日多数のがん細胞が発生していますが、免疫細胞が水際で退治してくれているのです。しかし、この「免疫監視機構」も万能とはいえません。

私も早期のぼうこうがんを自身で見ましたが、私のぼうこうがん細胞はもともと私の正常なぼうこうの細胞ですから、私の免疫細胞にとっては異物に見えにくいのです。

免疫細胞の攻撃をかわし、ある日生まれたたった一つの細胞からがんの長い物語は始まります。細胞分裂によって

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

いわれます。
私のようながんの専門医でも、5ミリのがんを見つけたのは至難の業で、簡単にいえば、1センチ程度にならないとがんを診断することはできません。つまり、多くのがんは20年といった長い年月をかけてようやく発見できる大きさになるわけです。

しかし、1センチになったがん

1〜2年ごとに定期検診を

1個が2個、2個が4個と、倍々で増えていきます。がん細胞の大きさは10ミ（ミは100万分の1）ほくらいですが、細胞分裂を繰り返して1立方センチになるためには、2の

30乗個、約10億個のがん細胞が必要です。

たった一つのがん細胞が約30回の分裂によって1センチ大になるわけですが、これに要する時間は10から30年程度と

う計算です。もつと進行が速いタイプのがんは約1年で2センチになります。私の場合、14ミのぼうこうがんを自分で行った超音波検査で発見しましたが、2センチ以下であれば、どの臓器のがんでも、ほとんど完治させることが可能です。

1センチから2センチのがんが症状を出すことはまずありませんから、がんの種類に応じて、1年あるいは2年ごとに検査を受ける必要があります。肺がんは毎年、乳がんは2年ごとに検診を受ける必要があるのです。

今回の計算はかなり単純化したものですが、定期的ながん検診の必要性をご理解いただけるかと思えます。

（東京大学病院准教授）